

二〇二二年度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

(三回)

国語

注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は から , 2 ページから 19 ページまであります。
合図があったら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

□ 次の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

目も眩むような金色のイチヨウの巨木が、真つ青に澄んだ空に向かって聳えていた。冷たくなった北風が、木々の梢を「
① 鳴らし、褐色の葉を「
② 「こぼしながら通り過ぎた。茶色い地面の上を枯葉が渦を巻いて流れていく。

カモの群れが低い声で合図を送り合いながら、せせらぎの水辺を探っているかたわらを、次から次へと枯葉が流れていく。浅瀬を歩く雪のように白いサギは、ときおり優雅な羽を広げ、水面をひらりと低く舞い飛んだ。「
③ 「した鳥の一群が編隊を組んで、林の向こうの空をさつと飛び過ぎていった。

大空を飛翔することができて、「
④ 「大地や野原を見渡しながら暮らしている鳥たちは、どのように世界を認識しているのだろうか。

ツバメは、春になると東南アジアの国々から日本列島にやってきて、家の軒下などに巣をつくり、繁殖して子育てをする。そして秋になると、日本の冬の寒さを避けて再び南の国々に戻っていく。

これとは反対に、ハクチョウは秋になると日本列島にやってくる。ハクチョウたちが夏の間に繁殖して子育てするのは、シベリアのツンドラ地帯だ。冷え冷えとした北の大地は、外敵も病原菌も少ないので、ハクチョウが子育てするには好都合なのだ。しかし短い夏に草原だったツンドラは、冬には凍結して白銀の氷雪に覆われてしまう。そこで日本の湖沼にやって来て、冬を過ごす。

渡りをする鳥は、鳥類1万種のうち半数にも及ぶ。季節の巡りに合わせて、何千種もの鳥たちが、何百万羽あるいは何億羽と、世界の空を北へ南へ飛行しているのだ。

渡り鳥に発信機をつけて調査した結果によると、コハクチョウの群れは4月に北海道のクツチャロ湖を出発して、3週間かけて3000キロメートル以上にわたる空を飛んだ。そして5月中旬に、北極海に面するツンドラ草原の河口に到着した。ここがコ

ハクチョウの繁殖地なのだ。

また、日本で繁殖して秋に南に帰っていくハククマ（タカの仲間）に発信機をつけたところ、9月中旬に長野県の安曇野を出発して、中国・ベトナム・ラオス・タイ・ミャンマーの空を飛んだ。さらにマレーシア・シンガポールを経て、11月上旬にインドネシアのジャワ島に到着した。50日強の日程をかけて、飛行した距離は実に1万キロメートルに近かった。

キョクアジサシは北極の夏が終わると南極へ向かい、地球をぐるっと回って何万キロにも及ぶ渡りをする。アネハヅルは標高8000メートルもあるヒマラヤの山々を越える。

⑤ 渡りをする鳥たちは、どうやって自分たちのコースを間違えずに、ちゃんと目的地に着くことができるのだろうか。

一方で、渡りをしていない鳥たちも、渡りをするのに似た不思議な能力を示すものがある。ハトは遥かな遠方からでも自分の巣に戻ってくるがよく知られている。ハトの脚に手紙を結びつけて遠隔地に通信することは、紀元前から行われていたという。現在のハトレースでは、トラックで2日かけて1000キロメートルも離れたところにハトを運び、ハトはそこからわずか23時間で帰ってくる。

（ 中略 ）

さてそれでは、渡り鳥やハトの内的な世界では、どのような感覚によって渡りや帰巣が可能になっているのだろうか。

まず、ミツバチなどの昆虫やサケなどの回遊魚がみごとな帰巣行動を見せて、そこでは「経路積算」という能力が発揮されていたことを思い出そう。

多くの動物では、自分の生まれた巣が特に重要だ。⑥ その巣がいつも世界の中心点として錨を下ろしていて、そこからどの方向にどれだけ離れたかが分かるようになっていようだ。昆虫やサケ、あるいは渡り鳥だけでなく、身近なイヌやネコにも、そうした帰巣能力を発揮する事例があることを私たちは知っている。

そのような能力を私たちは持っていない。もしかすると羅針盤も持たずに大旅行や大航海をした古代人には、ある程度そうした

能力があつたのかもしれないが、現代人ではすっかり失われてしまった。生物たちの能力というのは、何かを獲得すれば何かを失わなければならない。それは、獲得するエネルギーをどう分配するかということにかかわる問題だからだ。

巣の中で卵から孵った小鳥のヒナは、すでに経路積算の能力を持っていると考えられる。幼い鳥は、自分が生まれた巣を中心として、徐々に内的な地図を形成していく。脳の中に精緻な羅針盤があつて、生物時計と一体となっており、巣から北へ行ったのか、南へ行ったのかという方角と距離が、どこにいても分かるようになっていく。ハトを麻酔して眠らせて運んでから放しても、ちゃんと巣に戻ってくる。このため羅針盤と時計は、眠っている間も働いているものと考えられる。眠っている間も、身体の細胞は働いている。眠るといふのはあくまでも脳の一部分で起こることにすぎないので経路積算の機能は、妨げられていないのだ。

このようにして1日24時間、羅針盤と時計が鳥の記憶回路の中に徐々に内的地図をつくっていく。幼鳥は、周辺のさまざまな感覚情報を得ることになる。目印にするのは、最初は眼で見たもの、匂いを感じたものが中心だ。眼で見たものの中には、私たちに見えない紫外線や偏光の情報もある。次第に成長して活動する範囲を、巣から周辺へと拡大していくにつれ、内的地図の範囲も拡大していくことになる。

やがて空高く舞い上がるようになると、鳥は太陽コンパスを用いて飛翔する。こごごうと鳴る気流の音響や、山や森林が風を受けてうーんと唸るような低周波の音響も目印になる。地磁気を感じることができるので、曇天で太陽コンパスが使いにくいときは、磁気コンパスを使うこともできる。

夜に渡りをする鳥たちにとっては、星が目印だ。北半球では、北極星を中心とする星座の形を認識している。

できていく内的地図は、精緻なものである必要はない。変化することのない主だった目印と目印をつなぐ点と線。それからその方角や距離を決めるための太陽や北極星の位置と生物時計で十分だ。⑦鳥の生物時計は、脳と眼の中に3つのものが確認されている。羅針盤と時計が整ってくれば、遠い旅をするための準備はできたようなものだ。

渡り鳥の集団は、生物時計で渡りに出発する時期を測っていて、それまでとは全く違った身体に変化していく。ふだんは夜には

活動しないのに、渡りの時期には外敵に発見されないよう夜間に飛行する鳥も多い。生物時計は、身体を変化させるべき時期を教え、渡りの開始と終了のときを知らせる。

ただし、⑧遠い旅をするにはもう1つ、脂肪の蓄積が必要だ。鳥によっては、渡りの前には脂肪の蓄積によって、体重が2倍にもなる。日照時間が時期を示し、体内の脂肪が一定量だけ蓄積されると、鳥の体内でホルモンが放出される。これが渡りへの衝動を生み出すことになる。

鳥は、渡りをしたくてたまらないむずむずした感覚に襲われる。鳥かごに入れられた鳥は、渡りの時期になると鳥かごに身体をぶつけて暴れ回る。部屋に閉じ込められた鳥は、一定の方角に向かって飛ぼうとして、何度も壁に頭をぶつけてしまう。

ホルモンの作用による内的衝動だと考えれば、私たちヒトでは思春期のもやもやした衝動や性欲に比較してみると推測が可能かもしれない。まるで鳥の渡りのように、家を出してはまた戻ってくる者もいる。

初めて渡りをする鳥は、目的地に行った経験がないのだから、頭の中に目的地までの地図がきちんとできているわけではない。1羽だけで飛び立った場合は、特定の方角をめざして、特定の距離だけ飛び続ける。飛んでいく方角と飛び続ける時間だけが、本能として刻印されているものと考えられる。

渡り鳥が事故によって群れからはぐれてしまった場合にも、自分の衝動に従って、特定の方角をめざして特定の時間だけ飛び続ける。⑨そこで仲間たちに再会できるかどうかは、運次第だ。

実際には鳥は1羽だけでなく、群れになっていつせいに飛び立つ。初めて渡りをする若い鳥は、群れの中の経験豊富な先輩に案内されながら旅をする。

柔らかな陽射しが降りAソングある晴れた日に、渡り鳥の群れはいつせいに大空へと飛び立っていく。晴れて風のない日は、視界が良いだけでなく、上昇気流が発生して鳥たちを空高く持ち上げてくれる。

巣から育った若鳥にとっては、初めての長旅だ。眼で仲間の鳥たちを追いながら、遅れることのないように懸命に羽ばたいてい

く。上空からはなだらかに広がる耕作地や森、きらきらと光る河川、灰色のビルや家々の屋根をBツラネタ街が遠くまで見渡せる。そして若鳥の頭の中には、生まれ育った巣を中心として描いてきた内的地図が、すでにしつかりと形成されている。鳥は、太陽や星の位置と偏光、あるいは地磁気によって、自分の位置や方角を知る。

⑩ 経験者は、記憶を頼りに何百キロメートルも先にある山や、地平線の彼方の千キロメートルも先から聴こえる低周波などを目印にして飛ぶ。遠くから伝わってくる風の匂いも、役に立つ。こうして鳥たちは、ところどころで立ち寄る安全な場所で休息したり栄養をCホキユウしたりしながら、地球をぐるっと回って、最終的には間違えることなく目的地に辿り着くのだ。

(『生物に世界はどう見えるか 感覚と意識の階層進化』 実重 重実)

〔注〕 *1 ツンドラ地帯 || 凍結した大平原。凍土帯。

*2 羅針盤 || コンパス。船舶や航空機に備える方位・進路を測る装置。

*3 地磁気 || 地球の持つ、磁石の相互作用となる磁気及び磁場。

*4 ホルモン || 生体内の内分泌腺や細胞から血液中に放出される化学物質。

問一 空らん「①」〜「④」に入る言葉として最も適当なものを次のア〜オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア がらがらと

イ ざわざわと

ウ 広々と

エ はらはらと

オ くるくると

問二 ―線⑤「渡りをする鳥たち」とありますが、これ以前に書かれている渡り鳥の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ツバメは、繁殖のために南方から日本に渡ってきて秋を日本で過ごし、繁殖期が終わると再び南に渡っていく。

イ 渡り鳥の中には、北極に生息するキョクアジサシのように、常に寒冷を求めて非常に長い渡りを行う鳥が存在する。

ウ 夏に日本に渡ってくるハクチョウは、繁殖と子育てを繰り返しながら、最終的に五十日以上以上の渡りをするようになる。

エ 夏の暑い時期にはシベリアで過ごし秋に涼しくなると日本にやってくるハクチョウは、寒冷地での子育てを好む鳥である。

オ 調査によると、越冬を目的として日本にやってくるコハクチョウは、春には集団で北上するということがわかった。

問三 ―線⑥「その巣がいつも世界の中心点として分かるようになっていて」とありますが、この機能はどのような仕組みによって渡り鳥に備わるのですか。それを六十字以内に簡潔に説明しなさい。

問四 ―線⑦「鳥の生物時計は、脳と眼の中に3つのものが確認されている」とありますが、ここで言う「3つのもの」の説明として最も適当なものを次のア～オの中から三つを選び、記号で答えなさい。

ア 体内にホルモンを放出させて、渡りの開始を促すもの。

イ 星を目印にした、外敵に見つからない夜間の渡りを可能にさせるもの。

ウ 地磁気を感知することによって、曇天でも目的地への到着を理解させるもの。

エ 日照時間に影響を受けて、渡りのために身体を変える時期を知らせるもの。

オ 目的地に辿り着くまでの渡りの時間を計り、距離を把握させるもの。

問五 ー線⑧「遠い旅をするにはもう1つ、脂肪の蓄積が必要だ」と言えるのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 体重の増加はホルモンの分泌を促し、若鳥の外的成長には欠かせないものだから。

イ ホルモンの放出は内的衝動を抑制し、無用な渡りを回避することができるから。

ウ 体重が増えることはエネルギーの蓄積となり、長距離の渡りを可能にするから。

エ 一定の脂肪が蓄えられると、渡る際の安全をある程度確保することができるから。

オ 一定の脂肪の増加により体の機能が調整され、渡りの欲求が発現することになるから。

問六 ー線⑨「そこで仲間たちに再会できるかどうかは、運次第だ」と筆者が考えるのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 仲間と合流できるかどうかの根拠があるわけではなく、集団から外れた鳥は、自らの本能に従って飛び続けることしかできないから。

イ 目的地に辿り着いたことのない渡り鳥は、経験不足のために目印を誤り、経験豊富な先輩たちに追いつくことは不可能だと想定されるから。

ウ 渡りの経験のない鳥は、経験豊富な渡り鳥と比べると確実に判断が劣るので、群れに再会できるかを考えること自体が意味のないことだから。

エ 渡りの衝動に駆られる鳥は、障害物に身体をぶつけて暴れ回るなどの行動を繰り返すため、目的地に向かう鳥などから遅れることになるから。

オ 初めて渡りをする若い鳥は、経験豊富な鳥たちに守られながら飛翔する環境がなくなると、トラブルに対応することがむずかしくなるから。

問七 ー線⑩「経験者」とありますが、ここでの意味として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 帰巢能力が高く、1羽だけでも巣に戻れる鳥

イ 懸命に羽ばたき、初めて渡りを経験している鳥

ウ 頭の中に目的地までの内的地図が描かれている鳥

エ 群れからはぐれるという渡りを経験した鳥

オ 群れ全体を見守りながら渡る経験豊富な鳥

問八 本文の内容の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 渡りのコースを間違えずに目的地に辿り着くために、渡り鳥は飛びながら空間情報の記憶を脳に刻み込み、それを保持し

再生及び統合を繰り返すことによって自分たちのコース情報として獲得する。

イ 渡り鳥は空高く飛翔しながら、高度に発達した視覚を使ったり、大気の流れや山脈から発せられる低く鈍い音を聞き分け

てそれを目印にしたりするなどして、徐々に内的な地図を充実させていく。

ウ 渡りの際の鳥の脳細胞は、眠っている間も働き続け、移動距離を測定するなどして飛翔にかかるエネルギーの分配を行い、

渡り鳥自体に渡りに対しての主体的な認識を持つように働きかける。

エ 渡り鳥は、頭の中に飛翔の方角と時間が先天的に刻印されており、渡りの経験を積むことによってそれに精緻な内的地図

を描き足すことができるので、往路と同じ軌跡で戻ることができるようになる。

オ 人間には見えない紫外線や天空の偏光を認識することができる渡り鳥は、移動中に渡りの方向と距離を視覚だけで測定し、

徐々に自分が巣立った場所を起点とした内的な地図を形成していく。

問九 ー線A「ソング」・B「ツラネタ」・C「ホキユウ」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

(一画一画でいいいにはつきりと書くこと。送り仮名が必要な場合、それも解答らんに書きなさい。)

〔二〕 次の文章を読んで、後の一から八までの各問いに答えなさい。

(ただし、**字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。**)

がしゃんと鋭い音がした。

わたしは体をこわばらせたが、耀真くんはもつとがちがちに硬直している。フローリングの床の上で、人形のスカートが砕けていた。耀真くんが手をすべらせたのだ。

直しようもない a 無残な人形を挟んで、わたしたちは動けなくなった。

「……耀真くん、大丈夫だよ。わざとじゃないんだもの、ちゃんと謝れば先生きつと許してくれるよ」

わたしは①でできるだけ優しい声で言った。耀真くんは生気を失ったような表情で、目を潤ませている。

ああ、この子はわたしが守らなければと、心から思った。このか弱い耀真くんを。

耀真くんは、芸術がわかる子なのだ。可憐なお人形の後ろ姿を見たかっただけなのだ。わたしがちゃんと先生に説明して、わかっ
つてもらわねば。

「一緒に謝ってあげるから。ね」

耀真くんの肩にそっと手を置く。彼は何も言わずに固まっていた。

そこに先生が入ってきた。トレイには、クッキーとオレンジジュースが載っている。ご機嫌だった先生の表情が、この部屋の異変にすぐ気がついて大きく崩れた。

「あ、あーっ！」

先生はあわててトレイをテーブルに置き、床にはいつくばった。

「……………私の……………私のリヤドロが……」

真まっ白しろな顔かほの先生せんせいが、わたしたちを見上げて「何があったの」と問う。耀真ようまくんがほろほろと泣き出した。

「耀真ようまくんなの？」

先生せんせいに言われ、わたしは耀真ようまくんの前に立つようにして言った。

「わざとじゃないです。耀真ようまくんはただ、素敵すてきなお人形にんぎょうだなんて、見たかっただけで。だから……」

叱しからないであげてください、と必死ひつじで続けようとしたとき、耀真ようまくんが言った。

「……千帆ちほちゃんが、やった」

え？

「僕ぼくはさわつちやだめだって言ったのに、千帆ちほちゃんが」

耀真ようまくんは、声を上げて泣き出した。

「えっ、ちよつと、耀真ようまくん……？」

あまりのことに、②半笑はんせういになる。先生せんせいは「なに笑ってるの、千帆ちほちゃん」と、ぴしりとわたしを制した。

「人は誰だれでも失敗しぱいするし、形かたちのあるものは壊こわれるの。だから壊こわしたことは怒おこらないわ。でもね、嘘うそが一番いちばんだめなことなのよ、千帆ちほちゃん」

わたしは絶句ぜつごして先生せんせいと耀真ようまくんを交互こうごに見つめた。

この美しい耀真ようまくんの涙なみだに心を揺ゆさぶられない大人おとななんているだろうか。いかにも気の強つよそうなたたと、b いたいけな耀真ようまくんのどちらを信しんじるかなんて、c 一目瞭然りよくぜんだった。

「耀真ようまくんのせいにするなんて。千帆ちほちゃんのほうがお姉さんでしょう」

お姉さん。

……そうだ。わたしは、お姉さんなんだ。

耀真ようまくんがお人形にんぎょうに手を伸ばしたとき、すぐに止めなかったわたしが悪い。

「……③ごめんなさい」

わたしはうつむいて言った。

耀真ようまくんがちらっとわたしを見たのが、目の端はしでわかる。

「もういいわ。危あやないから、片付けは先生せんせいがやるわね。お菓子かし食べてて」

先生せんせいは冷たい口調くちやうでそう言い、わたしたちをテーブルうながに促うながした。先生せんせいがかちやかちやとお人形にんぎょうを片付けている間ま、わたしも耀真ようまくんも、目の前のクッキーきょきに手をつけることもできずに押し黙だまっていた。

結局けつぎ、耀真ようまくんとはひとこともしゃべらずに別わかれた。

家に帰かえってからわたしは、ずっと耀真ようまくんのことを考えていた。

夕ご飯ゆふめしのあと、お風呂ふろに入りながらこれからどうしようと思った。連絡れんらくノートには、レッスンの内容りやうが簡単に書かかれているだけだった。先生せんせいは「もういいわ」と言ったけど絶対絶対怒おこってるし、十万円じゅうまんもうちが弁償べんしょうしなくちゃいけないかもしれない。

(中略)

そうだ。

スグルはいいヤツだ。わたしだってわかってる。

お父さんもお母さんもおじいちゃんもおばあちゃんも、スグルばかりかわいがる。でも仕方ない。気きばかり強いわたしよ、あんな無邪気むじゃきで素直すじなスグルのほうが、そりゃあかわいいに決かまってる。女の子おんなこなんかつまらないって、みんなそう思おもってるのかもしれない。

「そう、仕方ない、仕方ない。ほんととはもつと甘あまえたいのになあつ」

神様はお湯をちやぶちやぶと叩きながら叫ぶ。

「そうだよねえ、チイちゃん」

優しい口調でそう言い、神様はおたまじゃくしになってわたしの左手のひらに戻った。

それで思い出した。「チイちゃん」と初めて呼ばれたときのこと。

どうしてそれが、嬉しかったのか――。

お風呂から出てパジャマに着替えると、洗面所のドアの向こうで「ねえちゃん、もう出たー？」とスグルの声がした。

ドアを開けるとスグルはパンツ一丁で立っていた。

「九時からのアニメ見たいからさあ、早く早く」

そう叫ぶスグルと入れ違いに洗面所を出て、台所に向かった。壁の時計は八時四十五分だ。お母さんが食器を洗っている。わたしは牛乳を飲もうと冷蔵庫の前に立った。

「あ、お姉ちゃん。さつきね、ピアノの先生から電話があったわよ」

ドクンと心臓が鳴る。冷蔵庫の扉に手をつけたまま、わたしはお母さんを見た。

お母さんはスポンジを片手に、顔だけわたしに向けた。

「耀真くんっていう男の子が、お母さんと一緒にお詫びに来たんだって。お人形を壊してしまったんだけど、それをちやんとお返さなくてごめんなさいって」

………耀真くん、本当のこと言ってくれたんだ。

④体じゅうの力が、ほじめていった。お母さんは水を止めて、エプロンの端で手を拭きながら続ける。

「先生も、一方的に責めるようなこと言っちゃって申し訳なかったって、謝ってたわよ。耀真くんのかばったんだってね、お

姉ちゃん」

わたしの左手がすうっと伸びて、お母さんの手首をつかむ。

びっくりしているお母さんの顔。左手はお母さんの手を引つ張り、わたしの頭に乘せた。⑤神様の勝手なしわざだったけど、それが何を意味するのかわたしにはよくわかった。

「……千帆、って呼んで」

「え？」

「お姉ちゃんじゃなくて、千帆って」

左手は、お母さんの手を誘導してわたしの頭をなでさせる。いいこ、いいこ。

はっきりとは覚えていない。でも、ホームビデオで見たことがある。

スグルが生まれる前の、わたし。

お父さんもお母さんも、わたしのことを「チィちゃん」とか「千帆」って呼んだ。そしてこんなふうには、いっばいなでてくれた。

「ちよっと……ちよっと、待って」

お母さんはタオルでしつかり手を拭きなおし、わたしの背中をそっと押しながら居間に連れて行った。おじいちゃんもおばあちゃんも自分の部屋にいて、お父さんはまだ帰っていない。

⑥お母さんは畳の上に正座すると「おいで」と言っつて両腕を広げた。

わたしはおずおずと、お母さんの腕の中に体を寄せる。お母さんは、赤ちゃんみたいにわたしをぎゅうっと抱っこしてくれた。

「ごめんね。なんだか、スグルを見てると千帆がすごくしつかりした大人に見えちゃうのよ。でも千帆だって、まだ小学生なんだもんね」

そう言ってお母さんは、わたしをいっばいまでてくれた。頭も肩も腕も背中も。涙がぼろぼろと頬を流れていく。

「千帆はきつと、耀真くんが年下だから、お姉さんでいなくちゃ、守らなきゃって、そう思ったのね。そういう千帆の気持ちが耀真くんにも届いて、本当のことを言ってくれたんだと思うわ」

ぴったり顔をくっつけているお母さんの胸から、穏やかな鼓動が伝わってきた。わたしは目を閉じて、子守歌を聴くみたいにお母さんの声に身をゆだねる。

「でも、罪をかぶることや我慢することが優しさではないのよ。千帆には千帆の大切な道があるの。忘れないでね。困ったことがあったら、こうやっていっばい甘えていいのよ。中学生になっても、大人になっても、ずっとずっとよ」

わたしはこくんとうなずいた。

大人になって、お嫁にいつてもわたし、⑦つまらない娘になんてならない。そう決めた。

お母さんはわたしの両肩に手をやりながら「それからね、千帆」と笑いかける。

「千帆が言ったのよ。これからはわたしのことお姉ちゃんって呼んでって。スグルが生まれたとき、得意そうな顔でね」

「……………え」

そうか。そうだったのか。

幼いわたしは、やっぱり嬉しかったんだ。

お姉ちゃんになることが、スグルという弟ができたことが。

「スグルが心配してたよ。ねえちゃん、今日は唐揚げふたつしか食ってないって。いつもは五個ぐらい余裕なのになあって。よく見てるね」

洗面所のほうから「今、なんじー？」とスグルの声が飛んでくる。

そういえばわたしはスグルに、連絡ノートを持ってきてくれてありがとうって、まだ言っていない。わたしはもう一度、ぎゅーっ

とお母さんに抱きついたあと、「八時五十五分だよ、早くおいで！」と叫んで立ち上がった。

(『ただいま神様当番』 青山 美智子)

〔注〕 *1 リヤドロスペースインの磁器メーカー。ここでは、先生が買った高価な磁器の人形のことを指す。

*2 神様Ⅱいつの間にか現れた神様。普段は千帆の左手に宿っているが、一人きりになると姿を見せる。左手に戻る過程でおたまじやくしのような形をとる。

問一 Ⅱ線 a 「無残な」・b 「いたいけな」・c 「一目瞭然」の意味として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で

答えなさい。

a 「無残な」

ア 見るにたえないほどのいたましい様子。

イ むごたらしく粗雑に扱われている様子。

ウ 粉々になって跡形もなくなっている様子。

エ 目も当てられないような情けない様子。

オ 見る影もないほどに変貌している様子。

b 「いたいけな」

ア いたいたしくみじめな様子。

イ けがれがなくすなおな様子。

ウ かよわくはかなげな様子。

エ おさなくいじらしい様子。

オ きよらかでうつくしい様子。

c 「一目瞭然」

- ア 一度考えてみれば明らかになること。
- イ ひとめ見ただけではつきりすること。
- ウ 傍から見た方がよく理解できること。
- エ だれの目にも問題であると映ること。
- オ よく考える必要があまりないこと。

問二 ―線①「できるだけ優しい声で」とありますが、千帆がこのようにふるまったのはなぜですか。その説明として最も適当なものをお選びください。

- ア 耀真に、先生が丁寧に扱っている人形を故意に割ってしまったことを謝らせるため。
- イ 先生の注意を受けていながら耀真を止めなかった自分の後ろめたさをごまかすため。
- ウ 耀真に、先生の言いつけを破って人形を壊して壊してしまったことを反省させるため。
- エ 先生の反応がとておそろしく、耀真を守るかどうか不安に思う気持ちを隠すため。
- オ 先生の大切な人形を割ってしまった耀真が動揺し凍りついているのを落ち着かせるため。

問三 ―線②「半笑い」とありますが、このときの千帆の心情として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 気の強そうな自分の言葉よりも美しい耀真の涙の方を大人は信じるだろうと諦めている。
- イ 純粹だと思っていた耀真のずるさが分かり、自分の見る目のなさにあきれ果てている。
- ウ 突然不利な状況に陥れられてしまったため、その場をとりつくりたいと思っている。
- エ 自分だけが安全でいれればいいとうそ泣きまでしている耀真の行動にとまどっている。
- オ かばおうとしたところ、耀真が自分自身の罪をなすりつけてきたことに困惑している。

問四 ー線③「ごめんなさい」とありますが、なぜ千帆はこのように発言したのですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分は犯人ではないが、年長者として注意しないでいたことにも責任があると考えたから。

イ 先生の言葉を聞き、お姉さんらしく幼い耀真を守らなければならぬと決意したから。

ウ 一方的に自分を責める先生を見て、何を言っても信じないだろうと判断したから。

エ これ以上、年下に罪を被せる卑怯者と思われるのは耐えられないと感じたから。

オ はやくこの苦痛な状況から逃れたくて、とにかく謝ってしまおうと思ったから。

問五 ー線④「体じゅうの力が、ほどけていった」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア うそをつき通すと思っていた耀真は、千帆が思うほど邪悪ではなく、犯人は千帆だと確信していた先生も、態度を改めてくれ、拍子抜けしたから。

イ お風呂でどうやって謝ろうか考えていた矢先に、先生から電話があったと聞き、怒られるのではないかと身体を硬くしたが、あっさりと解決して気が抜けたから。

ウ 千帆が大事な人形を壊したと知っている先生からの電話に、母は千帆を信じてくれるだろうかと不安だったが、母だけでなく先生も理解してくれていて安堵したから。

エ 先生から電話が来たと聞いて、自分が高価な人形を壊したという先生からの連絡かと思いきや緊張感が走ったが、耀真が事実を打ち明けたと分かりほっとしたから。

オ 高価な人形を弁償しなければならぬと親が知り、叱られるかと身構えたが、耀真が千帆に罪をなすりつけたことを謝罪したため、その必要がなくなったから。

問六 —⑤線「神様の勝手なしわざうわたしにはよくわかった」とありますが、千帆は、神様が自分のどのような思いをくみ取

てくれたと理解したのででしょうか。その説明として最も適当なものを次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何度も「お姉ちゃん」と呼ぶ母に、これ以上大人扱いしないでほしいということ。

イ 姉として我慢することなく弟が生まれる前のように、母に甘えたいということ。

ウ 母に、「わたし」の話を片手間ではなく集中して聞いてもらいたいということ。

エ ずいぶん長く頭をなでてもらっていないことを母に気づいてほしいということ。

オ 弟ばかりかわいがる母に今度は「わたし」のことだけ見てもらいたいということ。

問七 —⑥線「お母さんは畳の上に正座する」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア〜オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 千帆をつい大人扱いしていたが、千帆の隠された寂しさに気づき、きちんと受け止めたいと思ったから。

イ 弟が幼いため、姉らしく振る舞うよう求めた結果、千帆を追い詰めていたことを謝りたいと思ったから。

ウ 千帆の行動に事の深刻さを察知して、込み入った話なら誰もいない部屋で丁寧に聞こうと思ったから。

エ 手のかかる弟ばかりに意識が向いて、姉の千帆を放っておいたことの埋め合わせをしたと思ったから。

オ まだ小学生の千帆を、しっかりしているからと大人扱いたことを反省し心から詫言びたいと思ったから。

問八 —線⑦「つままない娘になんてならない」とありますが、このときの千帆の心情はどのようなものですか。そのように感じ
たきっかけも含めて四十五字以内で説明しなさい。

